

環境問題における人間中心主義に関する一考察

ーフィヒテの自然観に即してー

中島 聰・村下 邦昭*

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

* 広島文教女子大学非常勤講師

(2005年9月21日受付、2005年11月7日受理)

1 本論の目的

我々が環境問題に取り組む際に、環境に対する我々の立場として、たとえば、人間中心主義、自然中心主義、人間と自然との共生などが考えられる。この内、人間中心主義は環境破壊の原因の一つとされ、それは『旧約聖書』の『創世記』や、近代的人間観に基づくものであるとされている。

本論稿はこのような近代的人間観に基づいて、人間中心主義の立場から環境問題を考える。その際、本論稿はドイツ観念論を代表する哲学者フィヒテ (J. G. Fichte: 1762-1814) の自然観を取りあげる。

哲学的に見て、ドイツ観念論において、自然(世界)を中心的に論じたのはシェリングである。シェリングはフィヒテ哲学から出発したが、フィヒテのように自我哲学を行わなかった。あるいは、フィヒテから多大な影響を受けたヘルダーリンやノヴァーリスといった初期ドイツ・ロマン主義者たちもまた、フィヒテの自我に人間精神の理想を見たが、それと同時に、自然へも目を向けた。

では、フィヒテが自然に関心を特に払っていなかったのか、といえ、そうではない。フィヒテは自然を自我が自己を高める契機であるとみなしていた。彼の哲学体系である知識学の叙述に従うならば、自然は非我であり、自我の認識の契機を為すが、自我によって立てられるものでもある。そして、この非我を無限に克服し、自己を高める活動が自我の努力活動として論じられる。

では、フィヒテは実際、自然をどのように理解し、自然とどのように対峙したのだろうか。それを考察することによって、従来漠然と論じられてきた感がある人間中心主義の意味が改めて明らかになるだろう。なお、今回の論考では、人間学的立場が強い初期知識学(1793年冬～1795年)を論の中心に据える。

2 自然の生成

〈自然の生成〉という言葉は環境問題において奇異に聞こえるかもしれない。しかし、知識学の立場では〈自然〉は〈自我〉によって〈生じる〉のである。

「物体は我々にとって生命なきもの、魂なきものであって、自我ではない。自我は自己を自己の外に在る何かある知性に対して自ら定立するべきであるのみならず、自我は自己を自己自身に対して定立するべきである。自我は、自己自身によって定立されたとして、自己を定立する。したがって、自我が自我である限り、自我は生と意識の原理をただ自己自身の内にもみ持つべきである」(GWL I.2.406)

このように物体は知性としての自我に対して定立されていなければならない。しかし、それは自我が自己を定立するという限りにおいてであって、自然が自己定立することはない。しかも、自我において意識(知性)が生じない限り、この物体もまた生じないのである。

「自我が非我を自己に反立するという条件下においてのみ、意識は可能である。この反立作用は、自我が自己の観念的能動性を非我に向けるという条件下においてのみ把握可能な方法である」

(GEW I.3.207)

ここにいう「観念的能動性」とは「自我の理論的能力」(GWL I.413)であり、認識能力などを指している。つまり、自我が自己を認識する活動を、自我以外のもの(非我)へと向けることによって、意識と物体とが区別されるということである。そして、先に引用したように、この区別された物体は〈生命なきもの〉とみなされている。このことを拡張すれば、非我は生命なきものを意味することになるが、フィヒテは実際、そのように論述している。

「人は最初に死した自然に、生、因果性、そして努力をもたらす。理論哲学に対して、自然は不活性な塊である。実践哲学によって、自然は初めて能動性を得る」(PP II.3.246)

知識学において、自然は死んだものである。なぜならば、自然は自己活動を、つまり能動性を持たないからである。自我が自然に関与することによって自然は初めて活性化するのである。しかも、それは理論哲学に含まれる認識活動によってではなく、自我が自然に働きかけるという実践的な活動によって行われるのである。すなわち、自然はただ観察されるだけでは能動性を得ないのである。

これに関して、フィヒテは弾力のある球の例に出し、物体内の力の発現によってそのことを示している。それは要約すれば次のようなことである。弾力のある球を押しつける力を外すと、球は一切の外的な作用なしに反発する力が発現する。また、押しつける力を強めれば強めるほど、球の反発力は強まり、また、押しつける力が弱まれば弱まるほど、球の反発力も弱まる。これらのような場合に発現する球の力は球に対してかけられた圧力によって生じている(vgl. GWL I.2.422)。これとは逆に静止した慣性系の場合についてもフィヒテは論じている。「生命なき物体は自己の外への因果性以外何も持たない」(GWL I.2.422)。つまり、弾力ある球がその形状を保っていられるのは自己の外に対する因果性(力)を持っているからである。しかし、この球は自分に対しては何らの因果性(力)も持っていない。物体が真に因果性を持つのは、自我の実践的な活動によってである。したがって、生命なき物体に備わっている自己の外への因果性とは、その物体が他の物体と区別されるという関係性である。そして、生命なき物体は反立活動を持たないので、自分自身を意識できない。したがって、生命なき物体は他の物体を意識できない。このような活動ができるものは自我のみである。その意味で、自我は自己の内への因果性も持っている。但し、この内への因果性は「力の感情」として感じられるだけである(GWL I.2.424f)。この力の感情が「生の原理であり、死から生への移行である」(GWL I.2.425)。

したがって、この力の感情を与えられることによって、自然は生命なきものから生命あるものへと移行できるのである。しかも、自然はそれ自体として存在するのではなく、自我によって定立され、さらには、その活動も自我によって付与されているのである。このような意味で、自我が自然に関わらない限り、自然は存在しないのである。これが〈自然の生成〉である。

3 人間と自然の関係

さて、自然が自我によって生命あるものとして生じるが、では、自我(人間)と自然とは具体的にどのような関係にあるのだろうか。これを論じるために、まず、フィヒテの著作から長い引用を行う。

「単なる表象という諸法則から端的に独立な非我と、それにしたがって非我が観察されるべきであり、かつそうでなければならぬところの諸法則は知識学によって必然的なものとして与えられている」(BWL I.2.135)

これに対して、次のような注が付けられている。

「このことが多くの自然研究者にとって奇妙に思われるにしても、自然研究者が自然の観察によって学ぶと思っている自然法則を研究者自身が最初に自然の内に投入していたということ、自然法則が最小のものも最大のものも、取るに足らない草の茎の構造も天体の運動も、一切の観察に先立って、人間の知識全ての原則から導出されうるということが、時が来れば、厳密に証明されうるとい

うことが示されるだろう。いかなる自然法則も、また一般にどんな法則も、それらが適用されうる対象が与えられていないならば、意識にのぼってこない、ということは真である。一切の対象が必然的に法則に一致したり、一切のものが同じ程度で一致したりしなければならないことはない、ということは真である。また、唯一の対象が全く完全に法則と一致しないし、一致しうるのではない、ということも真である。しかし、我々が観察によって法則を学ぶのではなく、法則を一切の観察の根底に置くということや、いかにして我々が自然を観察すべきかということが、我々から独立な自然の法則というよりは、我々自身に対する法則であるということは、まさに上述の理由から真なのである」(BWL I.2.135f Anm.)

このような立場で自然を理解するというのは、たとえば、現代の人間原理宇宙論などにつながる態度だろう。しかし、当時の科学の水準から考えれば、フィヒテがそのような立場を予見していたとは思われない。だが、このような科学観は知識学から演繹される必然的な態度である。たとえば、フィヒテは次のように論じている。

「一切が自我に一致すべきであり、一切の実在性が自我によって端的に定立されるべきであるという要求は、人が実践理性と名づけ、正当にそう名づけるという要求である」(GWL I.2.399)

自我が自然を生み出し、能動性を与えたように、その実在性も自我によって与えられる。そして、運動としての能動性や実在などという自然の在り方、つまり、自然法則は、自我の法則に従わなければならない。このことに関して、以下のゲーテの文章が興味深く関連づけられるだろう。

「人間は自己の周りの対象に気づくやいなや、人間は自己自身にそれに関係づけて観察するが、このことは当然である」(Goethe, S.844)

ゲーテは、このような態度は人間にとって対象が「有益か有害か」という利害関係に基づいていることを認めているが、人間が対象を観察する際には、そのような利害関係を無視して観察すべきであると論じている(vgl. Goethe, S.844f)。つまり、科学的な観察(観測)において、主観性を排除することをゲーテは論じたのである。しかし、フィヒテは、観察が観察者の行為、つまり主観性に関わることを論じているのである。そして、それはゲーテが「当然」とした人間の行為でもある。フィヒテはあくまで人間と対象(自然)とを切り離さなかった。しかも、その対象は観察者の立てた法則にしたがう。このことは、哲学史的には、カントの物自体の克服を意味する。即ち、物自体による触発を否定し、さらには、物自体という認識されえないものはない、ということをフィヒテは論じる。全ては自我(人間)によって認識(観察)されうるのである。

それ故、フィヒテは観念論の立場を突き詰め、独我論的な立場に在るわけではない。なぜならば、自我が自己を意識するためには、自我でないもの、つまり非我を必要とするからである。自我は意識において非我(自然)を必要とするが、自然がそれ故に自我に対して優位に立つのではなく、自我が意識として存立するために必要とされるものであって、必然的なものではない。論理的に考えても、非我が自我の否定形である以上、非我は自我を必要とする。

人間は自己の主観的な法則に基づいて自然を観察する。それは自然の状態を人間に対する利害関係に基づいて判断させる根拠ともなる。しかも、それは個々の人間の利害関係であって、人間全体の利害関係ではない。先に引用したゲーテの論文において論じられたり、現在行われたりしている再試・実験の再現などはここでは問題とはならないのである。検証可能ということが問題とならない個別的な判断のみが自然に適用されるのである。このようなことに関して、フィヒテが、個々人の感覚は共有されない、と論じているが傍証となるだろう(vgl. GWL I.2.439f)。これは日常経験されることである。たとえば、同じ鍋から注がれたカレーが辛いのか甘いのかは個々人の感覚の違いによる。そこに客観性が入る余地はないだろう(少なくとも相関的・相対的な立場である)。このような主観的観察という立場から見れば、環境問題も同様であると考えられるだろう。たとえば、或る人が森の一部を伐採する際、その人はそれにより害獣などを駆除でき、快適な生活を得ると思うかもしれない。しかし、このような森林伐採により大気や土壌など

の環境が悪くなると思う人もいるだろう。それ故、環境問題において、何を良しとし、何を悪しとするかは、その人の信念・信条に基づく感情問題が絡むだろう。或る一つの環境保護団体の中で意見が相違するということも、究極的には個人的利害関係が働いているからと私は考える。つまり、フィヒテの論述が突き詰められれば、環境問題は個人の利害問題に直結する問題となるのである。

4 環境問題における人間関係

環境問題において人間中心主義を突き詰めると、その先に人間個人の利害関係があることが示された。さらには、それが〈共同体〉内部、あるいは複数の共同体間においても生じる可能性もあると思われる。それでは、共同体を形成する人間同士は環境問題において、どうあるべきなのか。

たとえば、フィヒテは次のように論じている。

「人間は自己の目的のための手段として理性なき諸物を使用してもよいが、理性的存在を使用してはならない。人間は理性的存在自身の目的のための手段として、一度たりとも理性的存在を使用してはならない」(EB I.3.39f)

本論稿の主題である環境問題に関して、この一節を解釈するならば、人間は自らの環境を人間以外のものを利用して、自分で改変してもよい、ということと読めるだろう。また、人間は自分の現在の自然環境が悪いからといって、他の人間を利用して、それを改善してはならない、とも言えるだろう。これは大きな問題である。なぜならば、人間は環境を変えるために他の人間を利用できないとすれば、無人島で孤独な生活をおくるような生活を既存の〈社会〉の中で行わなければならない、ということになるからである。

これを回避するために、フィヒテは同時期、次のように論じている。

「人間を取り巻くところで魂は洗練される。人間が増えれば増えるほど、人間の人間への影響はますます深まり、広められる」(WM I.2.88)

つまり、人間同士の関係において、各人は成長する。無論、人が増えれば、その間で諍いが多くなる。つまり、いわゆる万人闘争に陥るが、フィヒテはこれを容認しない。確かに、各人は各人の利害に従って活動することによって、相互に衝突を起こす。しかし、このような無秩序の状況はまとめられなければならない。但し、そのまとめかたは一方的な力関係によってではなく、対等な力関係によって行われなければならない。

「衝動〔社会的衝動〕は交互作用、相互的な影響、相互的な授受、相互的な受動と能動を目指すのであって、他者がそれに対してただ受動的な関係に立つところの単なる因果性や単なる能動性を目指すのではない。その衝動は、我々の外に自由な理性的存在者を見出し、彼らと共に社会に参入することを目指す。その衝動は物体界におけるように従属〔Subordination〕を目指すのではなく、協調〔Koordination〕を目指す」(EB I.3.39)

先に引用箇所で見たと同じように、人間が自然を利用しても良いが、人間を利用してはならない理由はまさにこれである。自然は人間の従属下にあるため、人間が自由に使用しても良い。しかし、人間は自然のように能動性を受け取るという単に受動的な存在ではなく、能動性を自ら持つ自由な存在であり、共に社会参画を目指す存在としてみなされるため、人間間に一方的な力関係があってはならない。したがって、人間は無人島におけるように孤独に生活をおくるのではなく、社会という連帯の中で生きていくのである。そして、フィヒテは論じていないが、おそらくこの社会において人間は共同して自然を利用するだろう。なぜならば、人間はそうに行うことが可能だからである。また、この共同関係（共同体）において、人間は互いへの影響関係を深めていく。

5 フィヒテの自然観と現在の環境問題

さて、これまで考察してきたフィヒテの論述に即した自然観が、現在の環境問題において、どのような

意義を持ちうるのか、ということをお節と次節において検証する。この検証によって、人間中心主義という立場が環境問題において、一つの側面としてだが、実質的にどのような立場であるのかということ、そして、その意義と問題点とが明らかになるだろう。そのために、たとえば、日本の「環境基本法」諸条文を、これまで論じてきたフィヒテの自然観に即して、解釈することを試みる。

「この法律〔「環境基本法」：引用者注〕において『環境への負荷』とは、人間の活動により環境に加えられる影響であって、環境の保全上の支障の原因となるおそれのあるものをいう」（「環境基本法」第2条第1項：「環境基本法」の条文は『環境基本法の解説』に収録分より引用。以下同様）

これは人間が自然に手を出すということ、つまり「人為的な原因に基づく」活動を指し示している（『環境基本法の解説』p.122：以下『解説』と略す）。この条文は環境問題に対するこの法律の基本的立場を明示したものであり、また同時に、語句の定義を行った箇所であるため、この条文の解釈は行わず、別の条文の解釈へ移る。

「環境の保全は、環境を健全で恵み豊かなものとして維持することが人間の健康で文化的な生活に欠くことのできないものであること及び生態系が微妙な均衡を保つことによって成り立っており人類の存続の基盤である限りある環境が、人間の活動による環境への負荷によって損なわれるおそれが生じてきていることをかんがみ、現在及び将来の世代の人間が健全で恵み豊かな環境の恵沢を享受するとともに人類の存続の基盤である環境が将来にわたって維持されるように適切に行われなければならない」（「環境基本法」第3条）

この条文に対して本論稿が注目する箇所は「人類の存続」と「限りある環境」という2つの文言である。

まず前者についてだが、『解説』によれば、「人間」は個別的な「ヒト」を意味し、「人類」は種としての「ヒト」全体を意味するとされている（p.141）。この定義に基づいて「現在及び将来の世代の人間が健全で恵み豊かな環境の恵沢を享受する」と述べられる際、「人間」が使われるのは「個々の人間が環境の恵沢を享受できるようにしなければならない」からであるとされる（前掲書 p.142）。問題は、個々人が環境の恵沢を受けることが環境の保全を通じて、人類の存続につながっているということである。フィヒテが、人間が自然を利用し、自己の目的を達成する、と論じる際に、この人間が個別的な人間であるのか、〈人類〉全体であるのかは明確ではない。しかし、前節で見たように、〈目的〉を共有する人間の集団を、フィヒテの論述において考えることもできる。さらには、一般的な人間、つまり、種としての人間を考えることもできるため、上述で論じられた〈人間〉は、「環境基本法」における「人間」と「人類」の両方の意味を持つと考えられるだろう（フィヒテの〈自我〉の意味にも関わる問題だが、本論稿の目的外であるので、この問題は割愛する）。

さて、この「環境基本法」第3条における「人類の存続」とはどのような意味であるのか。『解説』には明確な解説はないが、この文言と同義的に使用されているのが「生存」である（vgl. 前掲書 p.140f）。つまり、〈人類の存続〉は種としての〈人類の生存〉の持続と解釈されうるだろう。しかも、それは「健康で文化的な生活に欠くことのできない」環境に基づいている。これに対し、フィヒテは自然（環境）は自己の目的を達成するための手段として捉える。この〈自己の目的〉に〈健康で文化的な生活〉も含まれるだろうが、それ以外のこと、たとえば、単なる享楽のために自然を改変することや収穫量を上げるために品種改良を行う、ということも含まれるだろう。特に後者が第3条にある「生態系」の「微妙な均衡」を破壊することは周知のことである。そのようにならないよう人間は活動すべきである、と第3条は規定している。だが、現実問題としては〈自己の目的〉のために、自己の利害関係のために、環境や生態系が破壊されている。その意味で、〈環境〉とは人類が存続可能であるための基盤であれば、いわゆる手つかずの自然でなくともよいと言えるだろう。『解説』によれば、端的に次のように述べられる。「環境を健全で恵み豊かなものとして維持することが人間の健康で文化的な生活に欠くことのできないものである」が、このような「環境が人間の活動による自然への負荷によって損なわれるおそれが生じてきている」（前掲書 p.140）。人類の存続が危機的状況にあるから、それを保全しようという論点があるが、これは目的論的ではないように思われる。つまり、自然への負荷が人間にとって有害であるから、それを軽減し、自然（環

境)の保全するという営利目的的な条文とも考えられる。ここに、ネスによって提唱されたディープ・エコロジーからの批判が可能である余地があるだろう。つまり、自然を汚染と資源枯渇から守るという先進国の豊かさの維持を目的とするシャロー・エコロジー、とネスが批判する環境への態度がある。ディープ・エコロジーは人間以外の生命の多様性を認めた上で、それを「環境における人間」から人間と環境とを「関係的・全体的場」から考える立場である(『ディープ・エコロジーとは何か』p.48)。

これらの立場に対して、フィヒテの論述にしたがうならば、自己の目的のために自然を利用することを人間はできるが、その手段としての自然が崩壊してしまうと自己の目的を達成できないため、自然を保全する、と論じられうる。これはネスの言うシャロー・エコロジーに近いが、しかし、フィヒテの立場では、〈豊かさ〉や〈文化的な生活〉といったことが自己の目的の中心なのではない。人間の目的は自己を高めていくことである。その結果として、豊かさなどを得ることもあるだろうが、それはあくまで付随的な結果である。知識学において自我が自己を高めるとは、自己の理想を実現していくことであり、その理想は自我自身が立てるものである。理想を実現していく中で道徳性や経済性などが問われるが、この理想そのものにはそれらはない。理想を実現するために、自我が自己の環境を省みることはないのである。

さらに、人間は、ネスが主張するように、自然と全体的な場に立つのではなく、人間中心の立場にあるのがフィヒテの論述である。繰り返しになるが、人間のために自然は存在しているという理由で、自然は保全されなければならない。そして、ここに「限りある環境」という二つ目の注目点が絡んでくる。

フィヒテは自然を人間の発展に関して手段とみなした。そして、知識学において、自然(非我)は人間(有限な自我)にとっては無限な存在である。これに対して、環境問題でしばしば述べられる〈限りある環境〉〈限りある自然〉〈限りある資源〉という言葉が存在する。確かに物理的に考えて、自然は有限である。それ故、フィヒテの述べる〈無限な自然〉は、自己の目的を永遠に(無限に)達成していくために自然は無限でなければならないという理想的・観念的なものに過ぎない。ここに両者の立場に大きな溝がある。

フィヒテの立場では、人間は固定的な有限性から脱却して、「無限に完成していくことが人間の使命である」(EB I.3.32)。「到達することのできない自身の究極目的、つまり、その目的への自身の無限な道があらねばならない、ということが人間の概念の内に在る」(ibid.)。そして、この使命あるいは目的の為に、自然は人間に使用されるのである。

しかし、もし、人間がこの使命のために自然を素材として無闇に使うならば、自然はそのうち、荒廃してしまうだろう。そのようなことはフィヒテの時代には予見されなかったかもしれない。なぜなら、当時、産業革命はまだ始まったばかりであり、南北アメリカまたはオーストラリアの開拓もまた始まったばかりだからである。しかし、その後、アメリカ合衆国では農業の大規模化によって、1920～30年代には既に大地が荒廃し砂嵐が起き、現在では、地下水を原因とする渇水問題も生じている。また、1960～70年代のいわゆる「緑の革命」によって、大地を酷使したためにインドや旧ソ連などで塩害などが生じ、耕作が二度と不可能になったところが少なくない。これらのことがフィヒテの言う〈人間を無限に完成させていく〉ことに通じるのだろうか。答えは明らかに否である。

科学技術は確かに人間の可能性を広げた。しかし、それが諸刃の剣であることは周知の事実である。この点で、我々が環境問題に関してフィヒテの論述から得るべきことは、たとえば人間の能力はあくまで自然の上に成り立っている、ということである。人間が自己の目的のために自然を利用することができる、ということは、自然が存在しないならば、人間は自己の目的を達しえない、ということを含んでいる。フィヒテは自然を人間の従属下に置いたが、実は人間は自然の従属下にもあるということが隠されているのである。そこにシェリングや初期ドイツ・ロマン派は人間(自我)と自然(非我)との確執を読み取り、フィヒテが否定した自然の優位性を前面に出したのかもしれない。しかし、彼らのように自然を前面に出すことは、他方で人間軽視へと陥りかねない。これらに対し、フィヒテ哲学とシェリング哲学の克服を標榜するヘーゲル哲学がこれに答えうるかどうかは、難しい問題である。しかし、ドイツにおける環境問題の論争においてヘーゲルがよく引き合いに出されることを考慮すれば、ヘーゲル哲学が当該の問題に対して一つの解答を示しうるものだろう。ただ、その前にフィヒテ哲学やシェリング哲学が本当に、現下の環境問題に直接的に発言できないかを考える必要もあるだろう。

6 環境問題における人間中心主義再考－総括に代えて－

さて、上述したように、人間は自然を自己の目的のために無闇に使用することはできない。しかし、フィヒテは自然の利用を制限しない。それ故、フィヒテの論述を現下の環境問題に適用させることは難しいと思われる。しかし、フィヒテの自然観は自然（環境）を破壊してきた人間の自然観を、そのまま反映しているように思われる。

「人間はただ必然的な秩序だけを諸物に置くのではない。人間はまた諸物に、自身が恣意的に選択したものを与える。人が進み出るところで自然が目覚める。人間の視線に応じて、自然は自身に関して新しくより美しい創造を受け取る準備を行う。既に人間の身体は、自己を取り巻く質料から形成されうという最も精神的なものである。人間周囲の状況において、空気はより快適になり、気候はより柔かになり、そして、自然は、人間によって居住地や生物の保育士に変えられるという期待によって活気づく。人間は生の〔roh〕質料を、人間の理想に従って組織化することや、人間に必要な質料を供給するように命じる」（WM I.2.87）

最初の一文は先に論じられたように、自然法則が自我（人間）に基づくものであることを端的に示唆している。それ故に、この引用の最後で論じられているように、人間は自然を自身にとって快適であるように自然法則を改変してきた歴史がある（たとえば、人間が自然を「生物の保育士」として土壌改良を行うことなど）。そして、フィヒテが論じるように、人間の目的の実現のために存在する自然というものは、人間中心主義を代表する考え方だろう。しかし、その結果、現実問題として環境破壊などが生じている。それでもなお、〈限りある環境〉下で、人間は自然を改変しつつ、〈持続的な発展〉を、フィヒテの言葉で表せば、〈無限に完成していくこと〉を目指そうとしている。

「（環境への負担の少ない持続的な発展が可能な社会の構築など）

第四条 環境の保全は〔中略〕健全で恵み豊かな環境を維持しつつ、環境への負荷の少ない健全な経済の発展を図りながら持続的に発展することができる社会が構築されることを旨とし、〔中略〕行われなければならない」

この「環境基本法」第4条は1992年の国連環境開発会議（地球サミット）において提唱された〈持続可能な発展〉を受けた条文である。この〈持続可能な発展〉の解釈をめぐる今尚議論が続いているが、基本的に人間が現在の社会システムや経済状態の中で生きていくために、環境を維持し、保全しなければならない、ということだと思われる。しかし、これは結局、人間が自己の理想のために自然を改変し、自然が人間にとって〈必要な質料〉を供給することを目的とするようにも思われる。このような自然（環境）に対する態度は、環境問題において批判される。しかし、自然をこのように捉えることは人間にとって必要なことであると、フィヒテは論じる。

「人間は未加工な自然あるいは動物的自然を自己の目的に従って変容することを目指す。この衝動は、人間の内にある最高の原理、つまり、常に汝自身と一致せよ、という原理に従属しなければならない。〔中略〕それ故、人間は〔中略〕このことによって非理性的な自然を自己に従属させることを求める。このことでもって、一切のものは自己の理性と一致する。というのは、ただこの条件の下でのみ、人間は自身、自己と一致することができるからである」（SU I.3.100）

幾度も論じているようにフィヒテは人間が自己の理想を実現するために自然を利用することを認めている。そして、それは同時に人間が人間であるためでもある。この観点に立つと、フィヒテの立場は、人間が、あるいは社会システムが自己の発展を持続可能にするために、自然は存在しているのではない、ということになる。更には、次のように言うこともできるだろう。たとえば、ある家電製品が10年前より消費電力を30%削減できたと宣伝された場合、数年前ならば、企業は商品の〈経済性〉を謳い文句にしながら、現在では〈エコロジー性〉を謳うだろう。だが、現実的には、電気の付けっぱなしや、水の無駄使いなどは多くの場合、家計の〈経済的損失〉として受け止められるだろう。「環境基本法」第4条は〈健全な経済の発展〉を謳っている。即ち、経済の目的として現下の環境問題に対する諸解決の方法は考えら

れている、とも言えるだろう。だが、フィヒテの立場は、そのような〈経済性〉を自然に対して与えない。人間同士は連帯し、社会を築くが、自然はその連帯のための素材である。それ故、人間がどれだけ自然を浪費しようとも問題にされない。なぜならば、このことは自然が〈無限〉に存在すると考えられているからである。だが、このような自然の〈無限性〉は、エントロピーの法則や化石燃料の残量予測、自然浄化能力の限界などによって科学的・技術的・現実的に否定されている。逆に、このような考え方や方法、実証例が持ち込まれるまでは、自然を人間は好き放題に使用していたとも言える。少なくとも 19 世紀以前の思想・科学には同じような考え方があったのではないだろうか。自然保護がともすれば、極端な自然讃歌へと進むのは、自然の無限性への回帰をどこかで考えているからかも知れない。そして、これは、人間中心主義のフィヒテが、自然を賛美したドイツ・ロマン派に影響を与えたという系譜を想起させるものでもある。このような意味で、フィヒテの自然観、フィヒテ的な人間中心主義は人間の自然に対する態度の歴史と、その結果としての現状の環境問題に対して利害目的に基づく視点とを与えるものである。

そして、環境問題における人間中心主義は一概に自然破壊の原因と呼ばれうるものではない。真に人間中心主義に立つならば、それは人間そのものの存立も不可能にしてしまう余地を残している。近代的人間観という語によって示される〈人間中心主義〉は、極度の〈自己中心主義〉でしかない。フィヒテは人間中心主義的論述を行うが、決して自己中心主義ではなく、自然との連帯を背後に隠し持っている。このことが、たとえばフィヒテにおける動物に対する立場の動揺として現れてくる（詳細はギルントの論文参照のこと）。さらには、フィヒテは自然に「内的な力〔vis inertiae〕」（CM IV.1.98）を認めている。死んでいる自然も、上述したように自然内部に存在する外への因果性を持っている。自然が真に〈死んでいる〉ならば、自然に内的な力は存在しないだろう。ここにフィヒテの自然観の独自性があり、これに基づく人間中心主義も、単純化された〈世界は人間を中心に動いている〉というようなものではないことが示されるだろう。このような意味で、これまでラウトによる以外に殆ど纏められなかったフィヒテの自然観（自然哲学）は再考されるべきであり、それに基づく環境思想も可能だろう。そして、そこで〈人間中心主義〉が改めて問われることになるだろう。（了）

凡例

フィヒテのテキストについては *J.G.Fichte-Gesamtausgabe*. を用い、これより引用した（全集の系列はローマ数字で、巻次とページ数についてはアラビア数字で表記。例：I.2.400（アカデミー版全集第 1 系列第 2 巻 400 ページ）。引用に際しては、I.H.フィヒテ編纂の全集 *J.G.Fichte's sämtliche Werke*. を適宜参照した。

原文・日本語訳における強調は全て一重下線にて表記した。筆者による強調は括弧<>にて行った。

使用略記号

BWL = *Ueber den Begriff der Wissenschaftslehre.*, 1794. (『知識学の概念について』)

CM = *Collegium über die Moral.*, 1796. (『道徳論講義』)

EB = *Einige Vorlesung über die Bestimmung des Gelehrten.*, 1794. (『学者の使命についての数回の講義』)

GEW = *Grundriss des Eigenthümlichen der Wissenschaftslehre.*, 1795. (『知識学の特性綱要』)

GWL = *Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre.*, 1794-95. (『全知識学の基礎』)

PP = *Practische Philosophie.*, 1794. (『実践哲学』)

SU = *Von der Sprachfähigkeit und dem Ursprunge der Sprache.*, 1795. (『言語能力と言語の起源について』)

WM = *Ueber die Würde des Menschen.*, 1794. (『人間の尊厳について』)

Goethe = *Der Versuch als Vermittler von Objekt und Subjekt.*, 1792. (『客観と主観の媒介者としての実験』)

参考文献

Fichte, J.G., *J.G.Fichte-Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften.*, hrsg. von Reinhard Lauth und Hans Jacob, Friedrich Frommann Verlag, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1962ff. (ad 1970 hrsg. von Reinhard Lauth und Hans Gliwitzky unter Mitwirkung verschiedener Autoren.)

---, *Johann Gottlieb Fichte's sämtliche Werke.*, 11 Bde., Hrsg. von I.H.Fichte, Bonn, 1834-35 und Berlin, 1845-46(Neudruck, Walter de Gruyter & Co., Berlin, 1971).

Goethe, J.W., *Johann Wolfgang Goethe Sämtliche Werke.*, Bd.16, Artemis Verlag, Zürich, 1949(Neudruck, 1977).

環境庁企画調整局企画調整課編著『環境基本法の解説』ぎょうせい、1994年

Lauth, Reinhard, *Die transzendente Naturlehre Fichtes nach den Prinzipien der Wissenschaftslehre.*, Schriften zur Transzendentalphilosophie. Bd.6, Hrsg. von G. Funke, K. Hammacher, R. Lauth, Felix Meiner, Hamburg, 1984.

内藤正明・加藤三郎編『岩波講座 地球環境学 10 持続可能な社会システム』岩波書店、1998年

アルネ・ネス著 斎藤直輔・開龍美訳『ディープ・エコロジーとは何か ―エコロジー・共同体・ライフスタイル―』(ヴァリエ叢書 4) 文化書房博文社、1997年

南博方・大久保規子『要説 環境法』(第二版) 有斐閣、2003年

Girndt, Helmut, Über den Umgang mit der empfindungsfähigen Natur nach J. G. Fichte., in *Transzendentalphilosophie als System.*, S.134-146, Felix Meiner, Hamburg, 1989.

(日本語訳 中岡成文訳「フィヒテにおける人間と自然との交流について」(『哲学論叢』第20号 pp.1-23) 大阪大学文学部哲学哲学史第二講座：1989年)

Eine Skizze von dem Anthropozentrismus in der Umweltfrage

- Nach dem Naturverständnis Fichtes -

Satoshi NAKASHIMA und Kuniaki MURASHITA*

Department of Socio-Information

Faculty of Informatics,

Okayama University of Science

1-1 Ridaicho, Okayama700-0005,Japan

** Hiroshima Bunkyo Women's University, Docent*

1-8-17 Sendamachi, Naka-ku, Hiroshima, 730-0052, Japan

(Received September 21, 2005; accepted November 7, 2005)

In der Umweltfrage man das Anthropozentrismus als eine Ursache von die Umweltgefährdung betrachtet. Wir behandeln den Sinn des Anthropozentrismus nach dem Naturverständnis Fichtes. Fichte bestimmt daß die Natur das Tot ist, und von dem Ich das Leben gegeben wird. Und die Natur wird für dem Zweck des Ich nach dem Interesse benutzt. Auch er behaupt daß der Mensch die Natur willkür benutzt, aber wenn man die Natur zerstört, so der Mensch nicht sein kann. Aber dieser Naturverständnis fichtes steht nicht ganz zu der Erhaltung der Umwelt in den Grund-Umwelt-Gesetz(in Japan) gegenüber. Man findet die Erhaltung und die Entwicklung der gegenwärtigen Gesellschaftsstruktur in den Grund-Umwelt-Gesetz. Fichte denkt daß die natur für dem Ich erhalten werden müssen. Nach Fichte schützt man die Umwelt nicht von solche Erhaltung, sondern für der Ausführung der menschlichen Zwecke. Dieser Naturverständnis Fichtes zeichnet die Geschichte von dem menschlichen Naturverständnis nach, und macht klar das Interessen vom Mensch in der Umweltfrage.